

# 近代日本における軍記物語の発信

——『保元物語』『平治物語』を中心に——

滝澤 みか

## 一、はじめに

二〇一七年十一月十四日、「教科書から消える？」という見出しのもと、歴史の教科書の用語の多さを改善するため、高大連携歴史教育研究会より扱うべき語を減らすことが提唱されたというニュースが報じられた。<sup>①</sup>坂本龍馬が削除の候補の一つとなっていることが話題となったことは記憶に新しい。龍馬の扱いが大々的に取り上げられていたその影で、削除の候補となる用語一覧の中には「軍記物語」や「源為朝」などの語も含まれていることが確認出来る。<sup>②</sup>前者は日本史上に起きたいくさを題材とする作品群のジャンル名であり、後者はその軍記物語の一つである『保元物語』の題材となった保元の乱に関わる武士の名である。一方、そうした文学作品を取り扱う国語教材に目を向けると、高校の授業において使用される東京書籍編『新総合図説国語 新訂版<sup>③</sup>』には、『保元物語』およびそれと一組で享受されることの多い『平治物語』の項目が立項され、それぞれ二百五十字程度の説明が挙げられているものの、現在の国語教科書の中でこれらの作品の内容が掲載されることはほぼなく、教育機関において通常、各乱のイメージや知識は、むしろ日本史を通じて得られていることが多いと考えられる。このように、現在では接する機会は減りつつあるが、かつてこれらの作品は国語や歴史の教科書の中では定番教材であった。

大津雄一氏は、軍記物語の一つである『平家物語』の近現代における享受の変遷を詳細に論じ、昭和期の研究に関する

分析では「明治以降の軍記研究、『平家物語』研究の不幸な到達点」をも明らかにした。<sup>(4)</sup> 軍記研究の「不幸な到達点」は、当然、同じく軍記物語に分類される『保元物語』や『平治物語』にも訪れる。近代においては、古典の文学全集や教科書・指導書、あるいは絵本など、一般人・学生・児童といった様々な層に向けて『保元物語』『平治物語』は発信され、活用・享受されていく。すなわち、『平家物語』や『太平記』とともに『保元物語』や『平治物語』もまた著名な軍記物語として扱われ、社会に与えていた影響も少なくないと考えられる。そうした、軍記物語にとつての近代という時代の重要性を考えれば、当時の『保元物語』『平治物語』の享受の実態を改めて捉える必要がある。大津氏は近代における『保元物語』の為朝の扱いについて分析しているが、<sup>(5)</sup> 『保元物語』あるいは『平治物語』自体について詳しい検証を加えているわけではない。また、栃木孝惟氏や志立正知氏は両物語の研究史を顧みる中で、近代の研究状況について言及しているものの、明治初期の研究動向や諸本論の研究の変遷などの一部分に留まっている。

『保元物語』『平治物語』は複数の諸本を持つが、近世に出版されるテキストとなつて以降、いわゆる「流布本」と呼ばれる、教訓性を強く帯びた内容を持つ系統の本文が広く読まれていくことになる。近代においてもそれは同様であり、全集などが刊行されるたびに、流布本が底本として翻刻されていくことになる。そこで本稿では、流布本の本文の特性も踏まえながら、戦前の明治・大正・昭和期において両物語がどのように読まれ、そして発信されていたのか、関連する言説を追いつながら捉えていくことで、近代の日本における軍記物語の享受の実態の一側面を把握していきたい。<sup>(6)</sup>

## 二、全集などにおける『保元物語』『平治物語』の解説

明治に入り、日本文学関連の全集や文庫が刊行され、一般の人々は物語をそれらにより享受していく。物語を全集などに収録して発信するには解説が必要になってくる。その際に、個々の全集や文庫の編集者・解説者が単独で作品の解釈を深めるわけではなく、先行する解説や学説を踏まえていることが多い。そのため、研究の動向により全集などの解説もまた変化していく。以下、期間を区分して検証し、時代ごとの特徴を捉えてみたい。

(一) 明治期における物語の位置付け——文学と歴史の境界線から——

『保元物語』『平治物語』が最初に學術論文に取り上げられたのは、明治二十三年（一八九〇）二月に「史学会雜誌」の第三号に掲載された、歴史学者の星野恒（一八三九—一九一七）による「保元平治物語考」とされる。<sup>(12)</sup> そのすぐ後、明治二十三年（一八九〇）四月からは博文館より日本文学全書の刊行が開始されている。全書のうち、『保元物語』と『平治物語』は明治二十四年（一八九一）に刊行された第十九篇に収録されており、これが近代以降、両物語が一般向けに刊行されていくことになる初例であろう。その『保元物語』の解題冒頭では、『平治物語』も念頭において以下のように記述をしている。

凡この類の書は、一向に小説とは言ひ下し難けれども、作者は、事実の外に興味を添えんと勉めなければにや、文浮華に過ぎたる所あるは、読む人の面白からんやうにとの下心なるべし。（中略）北畠准后これを論じて曰く、保元平治よりこのかた、天下乱れて武用さかりに、王位からくなりぬ。いまだ太平の世にかへらざるは、孝行の破れそめしによれる事とぞ見えたる、といへるは、誠に知覧の判る、所を明にしたる詞なり。この書を読むもの、よろしく心を用ゐる所あるべし。

ここでは「事実」すなわち史実と、「文」の「浮華」すなわち物語の要素との差異に着目することに主眼が置かれていると言える。全書の編者の落合直文（一八六一—一九〇三）は国文学者であり、国語教科書の編纂にも携わっていく人物であるが、解説中の「事実の外に興味を添えんと勉めなければにや、文浮華に過ぎたる所」「下心なるべし」（傍点論者）といった表現からは、作品が持つ文学的な要素が肯定的に捉えられているとは言い難く、さらに「この書をよむもの」に向けて、「北畠准后」すなわち北畠親房（一二九三—一三五四）の『神皇正統記』（一三四三年成立）における批評に沿い、以降乱世となったことを意識するように説く姿勢は、歴史的な観点からの読書を導いていると言える。近代に入り、両物語を正面から扱った最初の論文が星野という歴史学者によるものであり、その中で星野が「実衍ヒテ虚ニ近シ」と評することからも分かるように、<sup>(16)</sup> 明治期に入り改めて両物語に向けられた視点は、国文学者・歴史学者に関わらず文学と歴史との境界を見据えるものであり、学界の動向と全書の解説とは、視点が連動していると考えられる。

その全書と前後して、両物語には頭注の付いた注釈書が作成される。漢学者・中根淑(香亭)(一八三九—一九一三)による、明治二十四年(一八九二)六月刊『頭書保元物語』、同二十五年(一八九二)十二月刊『頭書平治物語』がそれである。中根は両物語を、『続日本紀』などの「漢文歴史」に対する「国文歴史」の嚆矢とする。文体の特徴にも踏み込んで解説はしているが、「国文歴史」という用語や「国史を造るは国文に如くはなく」という記述、「歴史を読むには……」と断り、歴史や故実、地理と比較した「通解」を載せていることから、中根の説明で言うところの「歴史」を「修める」という観点から物語を見ることが解説の中心であることが分かる。

このように、文学的要素の評価がさほど見られない解説の傾向から変化が訪れるのは、明治三十年(一八九七)に古典学者・今泉定介(貞助)(一八六三—一九四四)による『保元物語読本』『平治物語読本』(明治書院)である。同書の緒言では、両物語をまず「鎌倉時代の初に出たるものにして、戦記文の祖なり」として紹介する。中根もすでに「戦記の開祖」と称していたが、「戦記文」という、末尾に敢えて「文」という語句を付けるように、今泉は文学史の中で作品を位置付けようと試みていると考えられる。さらにその言葉と共に、両物語は以下のように紹介されている。

其の文の雄壮なるは、おのづから、当時の人情風俗を知るに足るものあり。抑、平安朝の文学は、風刺艶麗にして、精神また優柔なれども、鎌倉時代のもものは、雄渾莊重にして、内また健強なること、猶その時代の人の心は剛勇にして、身には甲冑をまとへるに似たり。されば、中等教育上の読本として、たゞに国文の模範たるのみならず、併せて精神鼓舞の一助とすべきことは、近來識者の認むるところなり。

注目すべきは、両物語を読むことで「精神鼓舞の一助」になり得るものとする点である。それは平安時代の文学に対して、「雄渾莊重」あるいは「内また堅強」、そして当時の人々の心を「剛勇」であるためという。当該書の底本となっている流布本段階の『保元物語』は〈秩序〉を重んじ、戦乱の世を戒める特性を持つと考えられることからすれば、物語を読ませることで「剛勇」に通じる「精神鼓舞」を示す意図があるとは考え難い。「近來識者の認むるところ」とされてはいるものの、改めて物語の内部検証がされることはなく、おそらく「戦記文」という言葉が与える漠然としたイメージやそれまでの時代における享受の延長で物語が捉えられたまま、「教育上」読むべきものとされているであろうことが窺える。同書

が刊行されたのは、日清戦争終結後であり、国家意識が高まっていた時代でもあった。その日清戦争の余韻が残る明治三十二年（一八九九）に刊行された、芳賀矢一（一八六七―一九二七）の『国文学史十講』（富山房）では、両物語は『平家物語』と共に以下のように言及されている。

是等の物語は総て歴史であるが、全く純粹の歴史ではない。余程潤色を加へたものであります、事實には背いても、面白く書くために色々のことを加へたものに違ひない。（中略）これ等の物語を史料として取ることに躊躇いたしません。併しそれと同時に文学としての価値は一層加はります。

芳賀は物語に「余程潤色」があることを肯定的に評価している。それはかつて星野が歴史学の観点から「虚ニ近シ」とみなした姿勢や、落合が「文浮華に過ぎたる所」と評した姿勢とは異なり、「文学としての価値」を見出すために作品を見ていることが分かる。この後、明治三十七年（一九〇四）刊の落合直文・井上頼国等による国文大観（明文社）においては、『平家物語』『神皇正統記』とともに両物語は「歴史部」に収録される。また明治四十四年（一九一〇）刊行の黒川真道編の日本歴史文庫（集文館）には、『平家物語』は収録されていない一方で両物語は収録されていることから、文学と歴史との狭間で物語は発信され続けるものの、国文学史という枠組みの中での位置付けも確かに生まれていくのである。<sup>(18)</sup>

以上のように、明治期における両物語の把握は、文学と歴史の境界線を見据える視点などから始まり、次第に文学史の枠内で語られていく萌芽が確認出来る。その中で着目すべきは、この明治期に刊行された、物語を総括した解説の殆どが、後述するような『保元物語』の為朝を特筆するというものではない点である。前出の今泉著『保元物語説本』の裏表紙には和歌が掲載されるが、それは崇徳院の歌である。すなわちこの時点では、為朝は物語の総括の際に、常に強調されなくてはならない存在というわけではなかったのである。<sup>(20)</sup>それを踏まえると、三木五百枝（生没年未詳）により作られた、明治三十三年（一九〇〇）刊の『保元物語講義』（誠之堂）は特異である。本書は「中等教育和漢文講義」シリーズとして刊行されたもので、章段ごとに詳解が付いているが、冒頭には次のような解説が見える。

（中略）ことに主として写したる為朝の如きは、性格一貫、我国古武士の面目を窺ふに足れり。（中略）されば、国文学家、国史家、いづれにとりても、研究すべき書なるは、いふまでもなし

両物語を「国文家」も「国史家」も「研究すべき書」であるとするのは、これまでに見た解説の流れと差があるものではないが、『保元物語』の登場人物の一人である為朝に焦点を当てる姿勢は、それ以前の明治期の解説・注釈書には存在していない。これは、前年に内海弘蔵（一八七二―一九三五）により「保元物語に於ける鎮西八郎為朝」（『史学界』一）一八九九・二）が発表されていることも関わると思われる。そしてこの為朝の扱い方は、大正期に入るとさらに各人により異なっていくのである。

## （二）大正期―複数の解釈の併存―

為朝は『保元物語』の代表的な登場人物のうちの一人である。『平治物語』においては、為朝に類似させて造型されたと考えられる源義平という武士が登場するが、彼は為朝に比類する人物として説明されることが多く、評価の基軸は為朝に置かれている。

明治末期になると、題目にその為朝の名を冠した、評論家・山路愛山（一八六五―一九一七）の「為朝論」（『独立評論』の四十一年の第五号から四十二年の第三号、一九〇八・七―一九〇九・三）や、大正期に入ると作家・幸田露伴（一八六七―一九四七）の「島の為朝」（『改造』の二月号、一九二六・二）が発表されていく。<sup>22</sup> 愛山の一連の論稿は大正二年（一九一三）六月に『為朝論』（新潮社）として出版され、その中では、多くは乱に至る経緯に筆が割かれており、実際に為朝について語られるのは同書後半からである。愛山は敢えて為朝について詳述する理由を、「彼れは時勢の回転期に方りて先づ頭を新しき方角に向けたる一人なればなり」と説明し、「古今に通じて行はる、人生の通則」を学ぼうと言う。そして為朝について以下のように評されていることは大津氏によつて指摘されている。<sup>23</sup> 該当箇所を挙げてみよう。

（中略）彼れの如き生れながらにして偉大なる血氣の勇者は真に時代の要求したる人物なりき。彼れは人為に對して反抗したる自然の児なり。學問に對して反抗したる本能の児なり。様々に粧飾したる偽文明を冷笑する野蠻の児なり。知識ありて氣力なき豐學の秀才に反抗する無智にして氣力ある豪傑なり。

注目したいのは、「血氣の勇者」とする評価に對して、「真に時代の要求したる人物なりき」というように最後まで肯定



的な姿勢が貫かれていることである。「血氣の勇者」が元々、推奨されるべき要素ではなく文学史上に登場したことや、流布本『保元物語』もまたその否定的なニュアンスを理解していた上で為朝にこの評価を下していると考えられることは以前論じた<sup>(24)</sup>。しかし既にここでは、そうした否定的な意味合いは問わず、「反抗」という言葉を繰り返し用いて、その姿勢ごと為朝を「氣力ある豪傑」として結論付ける。すなわち愛山のこの文は、流布本文の特性は顧みられることなく、「学問」「文明」「知識」といったものを含む近代という時代に即して新たに両物語を位置付けていくことが求められている時代になっていることが分かる、象徴的な一文であると言えよう<sup>(25)</sup>。

同じく大正二年に刊行された国文学者・鳥野幸次（一八七三～一九六一）による『保元物語評釈』（明治書院）には、著者が最も筆力を労したるは、いふまでもなく本戦乱中の大立物たる為朝の描出にあり。為義の如きすら、なほ為朝との対照上、幾分無能に、未練に、写されたるにあらずやと思はる、ものなきに非ず。（中略）著者が本書の主人公たる為朝の地位に対して、十分ある同情を有せし結果に外ならざるべし。斯して、為朝は本朝無双の英雄として、児童走卒の間にも喧伝せられ、（以下略）

と記される。為義を「無能」に表現しているとするが、流布本はむしろ為義と為朝の守護する門をそれまでの諸本と入れ替えて、為朝の勇猛さなどを利用して為義を造型しようとする姿勢を持つと考えられる<sup>(26)</sup>。しかし「異本」として諸本の存在が改めて研究対象となっている時代であっても、そうした特性はやはり顧みられることはない。

こうした為朝を強調して物語を捉える姿勢が『保元物語』の解釈として直ちに統一されるわけではないことは、同二年九月に刊行された池辺義象（一八六一～一九二三）編の校註国文叢書から分かる。校註国文叢書には両物語は『平家物語』と共に収録され、関根正直（一八六〇～一九三三）による序文では為朝への言及は見えない。大正十四年（一九二五）に刊行された校注日本文学大系においても『平家物語』と共に両物語は収録され、解題では為朝や義平の合戦での動向について言及はしているものの、それだけを強調するような書き方はしていない。大正四年（一九一五）には藤岡作太郎（一八七〇～一九一〇）著『鎌倉室町時代文学史』（国本出版社）が、大正十一年（一九二二）には野村八良（一八八一～一九六六）著『鎌倉時代文学新論』（明治書院）が刊行されている。特に野村は「故に保元平治必ずしも軍記物語の祖に

あらず」と述べるように、中根・今泉以来踏襲されていた、それまでの両物語へのイメージを相対化する動きを見せる。野村は室町末期・戦国期に成立したと考えられる流布本段階の本文を主に取り扱っているため、室町前期に書写された記録が確認出来る覚一本が主流である『平家物語』よりも後出であることは、各成立期の検証が進んでいる現代から見れば当然ではあるものの、この時期に従来の研究を再検討している点は重視される。野村に先立ち、藤岡も同じくその成立順に疑問を呈し、自ら検証している。野村はさらに、「保元物語の文学的価値」に富むのは、義朝の幼少の弟の処刑話や為義北の方の入水話であるとし、為朝に特別な言及はしない。また、津田左右吉（一八七三―一九六一）により、『文学に現れたるわが国民思想』（岩波書店）が刊行されたのは、藤岡・野村の著書刊行の間の大正七年（一九一七）である。同書には「武士文学の時代」として国民的英雄の形成についても言及しているが、そこで掲げられているのは『平家物語』の重盛、『義経記』の義経、『太平記』の楠木正成であり、為朝や義平は姿を見せない。

このように叢書の類や研究書、一般書を見ると、大正期は異なった観点の解釈が併存していた時代であると言える。それは作品の受容状況として自然なことであるが、次第にこうした多様な観点は姿が確認出来なくなっていく時代を迎える。

### （三）昭和期―解釈の終着点―

昭和に入っても、両物語は全集や文庫に収録され続ける。昭和三年（一九二八）に正宗敦夫（一八八一―一九五八）により刊行された日本文学全集では、成立年代や作者の問題への解説に徹しているが、「世に所謂軍記物のいでき始めの親とたふべきもの」であることに異論はないとし、藤岡・野村の問題提起には触れられず、大正期以前へと戻っている。<sup>②</sup>昭和十二年（一九三七）刊行の雄山閣文庫では湊元克巳（生没年未詳）が校注に当たり、その略解には岸谷誠一（生没年未詳）の『新訂要註保元・平治物語』（三省堂）および鳥野の『校注保元平治物語』（明治書院）を参考した書籍として挙げている。鳥野による作品把握は先述した通りであり、昭和五年（一九三〇）には鳥野の著書の増訂版が刊行されている。そこに新たに付けられた緒言では「鎮西八郎為朝の勇猛無比な射戦が、其の中心を為してゐる」、さらに「悪源太義平の壮烈精悍な活躍が眼目を為している」とする。岸谷の『新訂要註保元・平治物語』は昭和八年（一九三三）に刊行された



ものであり、「其の中で為朝・義平は最も代表的なものであり、特に保元は為朝一個人の英雄譚の如き観を呈してゐる」という。義朝の幼少の弟の処刑話や為義北の方の入水話にも触れて「芸術的」と称する視点も提示しているものの、為朝の勇猛さを作品の中心に据えない解説はなくなっていくのである<sup>(9)</sup>。

こうした解釈の果てに、最終的に物語はどのように発信されたのか。その終着点の一つが、富倉徳次郎（一九〇〇～一九八六）による『保元・平治物語の精神と釈義』（旺文社、一九四四刊）である。富倉は国文学者であり、戦後は大学教授を歴任し、軍記物語研究を専門としていた。戦前に『ものゝふの文学』を著し、その評価については大津氏が論じている。<sup>(3)</sup>『保元平治物語の精神と釈義』は、『ものゝふの文学』の後に刊行されたものである。題名の通り、『保元物語』『平治物語』の内容あるいは構想といった内面（『精神』と、解釈・注釈（『釈義』）を解説したものである。旺文社から古典教養シリーズとして刊行され、他には『万葉集』や『枕草子』なども刊行されているが、『平家物語』はシリーズ名を連ねていない。同書の冒頭に掲げられた序を次に見てみよう。

この書によって保元・平治物語に対する親しみを得、日本戦記文学の文学としての意義を感得せられ、同時に又その持つ伝統に思ひをいたし、この書が現下大東亜戦争の下にある若き学徒の心を培ふところあれば、筆者の本書執筆の目的は大半達せられたといへるのである。

昭和十八年七月

序文の執筆は昭和十八年（一九四三）、刊行は太平洋戦争が激しさを増していた昭和十九年（一九四四）一月のことである。富倉は本書を執筆したことの目的を、「現下大東亜戦争の下にある若き学徒の心を培ふところあ」るようにとする。かつて自分が学生時代に両物語に触れたことにも言及し、「大正時代の学生には」表現がよく呑み込めなかったことに対し、「現代が逞しい時代」であることにより、「両物語の意味」は読解しやすいのではないかと期待する。釈義では富倉が選んだ幾つかの小話を取り上げられ、解説する体を取っている。『保元物語』では「こゝではこの物語の中、理想的武人として最も活躍させられてゐる鎮西八郎為朝を描いた章を抜いた」とし、「こゝに武人的なるもの、輝かしい表現を、読取るべきである」と説くのである。為朝は、日本人にとって「理想的」な人物でなくてはならなかったのである。

これを踏まえ、さらにもう一つ、同十八年四月に刊行された松田武夫『戦争と古典物語』（越後屋書房）を見てみたい。松田は当時大学などの講師を経て文部省図書監修官を務め、戦後も大学教授を歴任している。「大東亜戦争の結末は、今後何年でつくかわからない」中で書かれた本書に収録されている「夜討奇襲作戦と鎮西八郎為朝」の章では、その章題通り、為朝の奇襲作戦の提案と真珠湾攻撃とを重ね併せて称賛するところから始まる。加えて、当該書の中で最も着目したのは、『保元物語』に見える、為朝が天皇の輿を射るという献策の記述を削除している点である。以下、松田が引用した文を掲示する。

然れば只今高松殿に押寄せ、三方に火を懸け一方にて支へ候はんに、火を通れん者は矢を免るべからず、矢を恐れん者は火を通るべからず。主上の御方心にく、も候はず。但し兄にて候義朝などこそ駈出でんずらめ、夫も真中指して射通し候ひなん。まして清盛などがへろへろ矢何程の事か候べき。鎧の袖にて扨ひ、蹴散らして捨てなん。為朝矢二つ三つ放さんずるばかりにて、未だ天の明けざらん前に勝負を決せん条、何の疑か候べき。

このあと、松田はこの為朝の献策を「何といふ自信に満ちた堂々たる言葉であらう」と解説している。松田は流布本の記述をそのまま引用しているのであるが、流布本文を以下に示してみる。

然れば只今高松殿に押よせ、三方に火をかけ、一方にてさ、へ候はんに、火のがれん者は矢をまぬかるべからず、矢をおそれむ者は、火をのがるべからず。主上の御方心にく、も覚候はず。但兄にて候義朝などこそ懸いでんずらめ。それも真中さして射おとし候なん。まして清盛などがへろへろ矢、何程の事か候べき。鎧の袖にて扨ひ、けちらしてすてなん。行幸他所へならば、御ゆるさを蒙て、御供の者、少々射ふる程ならば、定而駕輿（しやう）も御輿をすてて逃去候はんずらん。其時、為朝参向ひ、行幸を此御所へなし奉り、君を御位につけまいらせん頃、掌を返すがごとくに候べし。主上を向へまいらせん事、為朝矢二三をはなたんずる計にて、未だ天の明ざらむ前に、勝負を決せむ条、何の疑か候べき。

（傍線論者）

左大臣頼長に策を問われた為朝は、天皇の輿を射ることを献策する。この為朝の献策は流布本『保元物語』の中でも「御ゆるさを蒙て」と配慮して書かれるが、不敬とも取られかねない発言であることには変わらない。松田は流布本に依拠

しながらも、傍線部にある天皇の興を射ることや、そうすれば天皇の周辺の者は逃げ出すこと、ひいては崇徳院を再び即位させることが可能といった発言を、特に省略の断りなく全て削除し、元から傍線部分がないように本文を提示している。この後、夜討ちに対して頼長は「以外の荒儀なり」という言葉を吐く。天皇に向けて矢を射ることも含めて流布本は「以外の荒儀」と強調していると考えられるが、松田は「無謀な事」「乱暴な事」と訳し、流布本の意味合いを表現し切れていない。大津氏は五十嵐力や佐々木八郎といった国文学者が為朝の献策について「言及しない」ことを既に指摘している。大津氏が「操作」と評すその実態は、五十嵐は該当箇所を「……」という形で省略し、佐々木は部分的に本文を抜き出して解説を施すことで言及を避けるというものである。前出の富倉も献策について言及こそしないものの、当該箇所の本文自体は取り上げている。しかし松田の場合、省略の痕跡すら示さず、抽出するわけでもないため、そもそも該当箇所が存在していなかったかのように改変しており、読者が元の記述を知る道筋すらない。松田はこの書の最後に「今こそ、われわれは、わが国の古典物語に立ちかへつて、われわれに訴へようとしてゐるところを静かに聞かなければならないのだ」と結ぶが、その立ち返るべき「古典物語」の本文が、為朝という一人の登場人物のために近代においてもなお改変され、揺らいでいたことが分かるのである。

以上、明治・大正・昭和期において『保元物語』『平治物語』が発信されるに当たり、流布本の特性は顧みられることなく、その時代に応じて読まれ、観点が変動していくことが分かる。その影響を最も受けたのが『保元物語』の為朝であり、為朝に比類する勇ましい武士とされる『平治物語』の義平よりもその度合いは強い。これは、両物語の近代における享受の状況が異なることにも関わりと考えられる。次節において、近代の教育の側面から違いを考えてみたい。

### 三、教科書・指導書から見る『保元物語』『平治物語』の享受と指導

富倉は『保元・平治物語の精神と釈義』の序で、次のように回想している。

私はかつて中学生の頃、教科書の中で保元物語の「白河殿攻め落す事」の章を読んだことがある。平治物語の「光頼

卿参内の事」の章を読んだことがある。

「読んだことがある」という表現から推測すると、接したのは国語教科書であろう。冒頭でこのように述懐していることから、深く富倉の記憶に残っていたもの、あるいは一般読者と共有出来る話題であったと考えられる。それほど、かつての教科書においてこれらの物語が収録されていないものを探すことの方が難しい。では、実際に教科書やそれを教える教員の指導書の中で、物語はどのように扱われていたのだろうか。<sup>(33)</sup>

## (二) 教科書における題材の違い

今泉による『保元物語読本』『平治物語読本』が、両物語を中等教育上において読むべきものとして推奨していたことは既に確認したが、その一方で、「殊に事実文章の教育上いかゞと覚ゆる条は、節略したり」としている点は注目される。目次からどの話が省略されたかは窺うことが出来、残されているのは崇徳院や為朝の話、為義最期の話が中心で、教えるべき素材は編者により取捨選択されている。

田坂文穂氏編『旧制中等教育国語教科書内容索引』<sup>(36)</sup>は、明治から昭和にかけて、中等学校向けの国語の教科書にどのような作品が採用されていたのかを一覧にしたものであり、それによると『保元物語』『平治物語』共々、その中にある逸話が多く採用されていたことが分かる。特に『保元物語』からは、殆どの教科書において為朝の話が掲載されている。その一方で、『平治物語』からの採用は必ずしも義平の話に特定されるものではない。同物語からは、宮中に参内し、天皇たちを軟禁する実弟を諫める藤原光頼の話が、義平の話と同じくらいに採用されている。それを考えると、『保元物語』からの為朝の話の採用率は圧倒的である。これは明治・大正・昭和の三時代を通じて同傾向にあったと考えられる。

女学校向けの教科書にも触れておくと、明治期では『保元物語』から為朝の話が採用される頻度はそれほど高くない。大正期に至っては、義朝の幼少の弟たちが処刑される船岡山の話の方が多くなるくらいである。それでも昭和期になると為朝の話の採用が増え、船岡山の話と同程度になる。『平治物語』では、義平の話よりも光頼参内の話の方が多く、女学校用の教科書であるため掲載されていてもおかしくはない義朝の愛妾・常葉の話については、大正期になって漸く収録されるが、

それも一例のみであり主流ではない。女学校における指導書として、垣内松三（一八七八―一九五二）編『女子国文新編第三版教授参考書』（文学社、一九三六刊）があるが、そこで選ばれている話は「鎮西八郎為朝」と「待賢門合戦の事」、すなわち為朝と義平の話である。垣内は東京帝国大学出身の国文学者・国語教育者として著名であり、そうした人物が編纂した女子教育向け参考書にも為朝・義平の話が採用されているということは、女子教育においても、優先される一般教養は女性哀話ではなく、為朝・義平の戦いぶりであったことが窺える。富山房編集部編『新修国文教授資料 女学校用』（一九三八刊）においても、採用されているのは常葉の話ではなく光頼参内の話である。

さて、明治期の代表的な教科書の一つである『中等国語読本』<sup>(3)</sup>は落合直文によつて編集された教科書である。当該書にも両物語は収録されているが、『保元物語』からは為朝の話が、『平治物語』からは光頼の話が採られており、両物語の享受の違いを窺わせる。すなわち、『中等国語読本』のような多用されていた教科書において、為朝と立場を同じくする義平の話は、必ずしも常に採用されるわけではなかったと言える。では、なぜ『平治物語』で多く採用されるのは光頼の話であったのだろうか。それは、光頼の話がどのように捉えられていたのかという問題にも関わろう。

昭和期に多用されていた教科書・指導書として、岩波書店から刊行された『国語』（一九三四刊）および『国語学習指導の研究』（一九三六刊）がある。同書でも採用されている話は、『保元物語』からは「鎮西八郎為朝」、『平治物語』からは「光頼卿の参内」の話である。『国語学習指導の研究』では、後者の採択理由について以下のように記す。

非常時の社会情勢の中にあつて、決死の覚悟を以て正々堂々と大義名分を説き、忠誠の至情を尽くした光頼卿の為人とその言動に接しさせようとしたもので、文芸的教材であると共に、賢哲の言行を叙し、愛国の至情を披瀝した国民的教材である。

指導の注意として、光頼の弟への諫言が皇室のためを純粹に思つての上でされたことが強調されており、明快さや意志的な強さは『平家物語』における重盛の諫言より傑出しているとさえ述べた。前出の『保元・平治の精神と積義』においても光頼の話は採用されており、富倉は「先づこの作の基調をなす精神である神国思想への反省、大義名分への反省の最も色濃く感得し得る」章であるとする。さらに「神国思想に基く君臣の名分に確固たる信念を持つ光頼の気魄」あるいは

「君臣の分を思つての悲嘆」は「読む者に迫るものがある」と評価する。このように皇室への忠誠や意志の強さ、道義を示すために、光頼の話は教科書に採用されていた。それは為朝の話が「新しい時代を劃した武士勃興の姿と声を記録してゐる」ゆえに採択された（『国語学習指導の研究』という理由とは明らかに異なる。すなわち、武士の勇猛などを学ぶために掲載される為朝の話とはまた別の側面で「日本人の思想感情」を伝える役割を『平治物語』は担つていたため、<sup>39</sup>為朝と類似する義平の話ではなく、光頼の話が多く教科書の題材に用いられていたと考えられるのである。

## （二）教科書・指導書の実態

一般書において本文の操作が行われていたことは先述した通りであるが、昭和に入り発行された国定教科書の場合でも同様の操作は行われている。昭和十八年発行の『初等科国語』に掲載されている「鎮西八郎為朝」は、為朝による夜討ち献策の場面から始まっているが、やはり為朝が天皇の輿に矢を射るという箇所は省略の断りなく一切削除されている。国定教科書においても、こうした本文の隠蔽とも呼べる操作が行われていた。さらにそれは、国語の教科書だけに限られる問題ではない。歴史の教科書を見てみると、昭和九年（一九三四）発行『尋常小学国史』において、「平氏の勃興」では保元の乱・平治の乱の説明がされる際に、全て『保元物語』『平治物語』が利用されている。その中で義平の活躍が一行でしか触れられないのに対し、二段落にわたって為朝の活躍は記される。そこには為朝の献策が含まれているが、問題となる発言については削られているのである。

このような教材をもとに、両物語は実際にどのように教えられていたのか。戦前の国文学界を牽引していた藤村作（一八七五―一九五三）・久松潜一（一八九四―一九七六）により、昭和八年（一九三三）には『保元平治物語抄教授参考書』（山海堂出版部）が発行され、教えるに必要な語釈や批評鑑賞を載せている。乱後の新院の様子や頼長の話は多くが省略される中、為朝の登場する話を取り上げられ、批評鑑賞が加えられている。特徴が見えるのは、以下に示す「白河殿攻め落とす事」の章段の解説である。

彼は勇猛の者ではあつたが、名乗つて出るもの以外は、射ないといふ位の情義をもつてゐた。ここに描かれた為朝は、



やはり勇あり情ある武士の典型的のものとなつてゐるのである。(中略)義朝は勇に於て為朝に劣るとするも、智将としての頭腦をはたかせてゐるものである。事實はともかくとして、もしこの物語のやうな事實であるならば、為朝がもう少し智が働いてゐたならば、決して敗をとるのではなかつたらうに。しかし筆者はやつぱり為朝を一種の偶像視して書いたものとおもはれるのである。

為朝がいくさに敗れた理由について、合戦中に一部の敵方の武士を殺さなかつた点を挙げ、「勝敗を念頭におくべき戦場では余りに鷹揚すぎるのである」とし、あるいは「もう少し智が働いて」いれぱとする。すなわち、「勇あり情ある武士」としての為朝像が傷付かないように、「戦場」といった環境や「智」という「勇」以外の要素から敗因を解説している。最後には「やつぱり為朝を一種の偶像視して」いたのだと結論付けていることから、こうした説明ならば、「武士の典型的人物」としての為朝像が成り立つとみなされていたであろうことが分かる。

一方、『平治物語』には殆ど批評鑑賞は付けられていない。最初に批評鑑賞が付くのは待賢門合戦の章段であるが、その場面の状況説明に際し、「光頼の威光に圧せられて面目をつぶした信頼は」という記述をし、当該場面には登場しない光頼に敢えて触れていることから、光頼の印象の強さを窺わせる。その一方、義平については「為朝に類した勇をあらはしてゐる」とするに留まる。むしろ義朝について、

彼の最後は悲惨だつたけれども、源氏の大将としてあつた態度を常に持してゐた。(中略)彼が智があり且、源氏の勢力があつたならば、父其他弟達を助けることも出来たであらう。

と記すことの方が注目される。別の章段では義朝の「武士的精神、教育態度」が「あざやかに描かれてゐる」とし、武士として義平よりも義朝の方が記述される量が多く、義平がさほど重視されていない様子が見出せるのである。

如上、『保元物語』の為朝の話が強調され、一般書同様の改変もされて教材化されているのに対し、『平治物語』においては富倉が光頼の話を記憶に留めているように、義平の話は教科書で絶対的に用いられる教材というわけではなく、光頼の話も同じく採用される。それは光頼の話に『保元物語』とは異なる側面で教えるべき内容が含まれていると判断されたためと考えられる。すなわち、義平は近代の『平治物語』の発信において絶対的に強調されるべき人物というわけではな

かったために、為朝と同じ規模で流布本の特性と近代の享受との大きなずれを持ちながら広く発信されるという状況は免れたのではないだろうか。

#### 四、児童向け書籍における『保元物語』『平治物語』の享受と発信

芳賀矢一が『国文学史十講』の中で「我々も子供のときから、武者絵などを見て義経弁慶とは一番早く近附になつたのです」と語るように、子どもの教養の中に、自然といくさに関わる作品は存在していた。それは明治期になつても変わらなかったものと考えられる。明治期における子どもと軍記物語については、雑誌「少年之友」を中心に検証した鈴木彰氏の先行研究がある<sup>(4)</sup>。ここでは氏の触れていない単行本などを中心に、児童への発信のされ方を追つてみたい。

#### (一) 軍記物語と児童教育

戦時下において最も大々的に刊行された絵本は、講談社の「子供が良くなる講談社の絵本」シリーズである。このシリーズでは、八幡太郎義家や木下藤吉郎なども題材とされ、昭和十二年（一九三七）には文・北村寿夫および絵・米内穂豊により『源為朝』が刊行されている<sup>(1)</sup>。この話の基盤は曲亭馬琴の『椿説弓張月』の内容となつている。例えば『保元物語』では、為朝は父・為義とは降参の意思を聞いて離別しているが、絵本では『椿説弓張月』を採用しているため、以下のように記される。

みやこを のがれた 為朝が、ある ひ たにがわの そばで やすんで いると、いくさで はぐれた ひとりの けらいに であいました。そして おとうさまが うちじにした ことを しりました。「ああ、おとうさまも う ちじになされたか。」と、さすがに つよい 為朝も はらはらと なみだを ながしました。

ここに意図されているのは、父親という存在の死には「さすがに」涙を堪えることの出来ない姿を書くことで、孝の心を持った為朝を描き出すことであろう。そもそも『保元物語』においては為朝が家来から父の死を聞くと、いう場面はな

く、『椿説弓張月』にしか存在しないため、『保元物語』が基盤ならばこうした展開には成り得ない。このように『椿説弓張月』と『保元物語』とで設定が著しく異なり、絵本が『椿説弓張月』を採用している場面は他にもある。開戦前、「源氏につたわるだいなよろいをいただいて」戦に出ることになったとするが、『保元物語』において為朝と源氏重代の鎧は結び付けられていない<sup>(4)</sup>。また、敗戦後に島流しにあつた為朝は、島の人々に恐れられているが、絵本においては島の人々を悩ませる大牛を退治したことで「うやま」われたとされる。これらは『椿説弓張月』に基づく造型であり、『保元物語』にはない要素により、為朝は模範的な人物として書かれているのである。しかし、絵本の内容全てが『椿説弓張月』に基づくわけではない。合戦中、為朝が、敵方の武士である伊藤六・五という二人分の鎧を射抜いた話や、大島で官軍と戦い一矢で船を射抜いた話は『保元物語』にしか存在しないが、この絵本ではその話が掲載されている。すなわち、絵本では『椿説弓張月』を基本に用いつつも、特に為朝の勇ましさを強調することが可能な部分については、『保元物語』も採用するのである。それはこの絵本を読むであろう子どもに配慮した融合であることは想像に難くない。当該絵本には前言が付いているが、そこには以下のような記述が見える。

現在の教育方針として、いわゆる歴史教育のありかたは、たぶん文化史的な観点からとりあげ、史上の人間や、個人について語られることが、わりに少ないようです。これを補うためには、児童によい野史や付説集が、一面、どしどし出なければならぬのではないかと思います。今日の子供は、歴史を知らなすぎるという声もよく聞きますが、これには無理からぬ点もあると考えさせられます。その是非は別としても、史的事実や、時代の特徴といったことが、もっと子供に知ってもらわなければ、じぶんの国の歴史についての理解が少なくなるのではないのでしょうか。(中略)

この為朝という人は、豪勇で涙もろく、親孝行で、それに、いかなる権威にも屈しない人です。こうした点も、子どもたちの訓育上、よい教材となるものと思います。

(傍線論者)

傍線部のような為朝観を前提に、「訓育」のために絵本が描かれたのであれば、前述したような融合が行われるのも当然であろう。また前言の冒頭を見ると、この絵本を読むことで歴史教育にも繋がることが望まれていると考えられる。つまり、こうした歴史的な内容を素材とする児童書において多方面での教育が期待されていることが分かる。

こうした傾向を踏まえると、問題になってくるのは、前節まで見てきたように為朝の天皇の輿を射ることを献策する場面であろう。昭和十年（一九三五）に刊行された碧瑠璃園（渡邊霞亭）著『偉人の少年時代』では、その題名通り「偉人」として為朝の話が収録されているが、ここで保元の乱について記述されるにあたり、天皇の輿を射る発言は削除されている。この改変は児童書では昭和期において急に行われるものではなく、明治期の段階から苦慮の跡が窺える。明治二十五年（一八九二）四月に刊行された『少国民』（旧名「小国民」）の第四年第八号において為朝の献策に関する記述があるが、<sup>(43)</sup>「然れ多きことながら、御免を蒙ふりて、御供の者三四人を射るときは」と書かれており、『保元物語』を踏まえながらも、天皇の輿を射るという物語の記述に対し「恐れ多」いことであるという認識を持つゆえに、加筆していることが分かる。さらに、大手出版社であった博文館からは、明治二十五年（一八九二）に、軍記物語に登場する人物たちの話が多く掲載されている『少年英傑 尚武史談』が刊行された。『保元物語』『平治物語』に関わる内容では、為朝・乙若（為義男）・頼朝・今若と乙若（義朝男）の話が収録されているが、ここでもまた、天皇の輿を射るという献策の記述は避けられている。国学者自身が児童書に関わった例もある。射手矢貞三氏著『少国民保元平治物語』（学習社、一九四一刊）がそれであり、著者の射手矢は、当時女子大の教授であった。同書の序文は次のように記される。

今や非常時中の非常時、当面の難局を打開し、次代の栄花を揮揚すべきわが青少年諸子の任務は、真に重大である。（中略）今こそ蹇々匪躬、公に奉じ、読書尚友、以て心魂を磨くべき秋である。編者はこれを思ふ余り、敢て両軍記の現代化を試み、古典の風格と祖先の雄風とを伝へようとした。もし渺たる本書が、親愛なる少国民諸子のために、壮心作興の一助ともなれば、幸慶これに過ぎるものはない。

本書が刊行された昭和十六年十一月は、対米戦争の危機が迫りつつある時期であり、「非常時中の非常時」「当面の難局」とは、こうした時勢を指すものと考えられる。その中で軍記物語を読むことと、「壮心作興」が直結させられているのは、前出した『保元・平治物語の精神と釈義』と同じであろう。この『少国民保元平治物語』の本文は流布本を採用していると考えられるが、為朝や義平を冒頭で「国史中の勇将」と称する。さらに興味深いのは、為朝が天皇の輿を射ようという進言が削除されていることに加え、『保元物語』冒頭で記されている、鳥羽院や崇徳院の関わる天皇家の採め事についても

一切を記さない点である。「趣味本位に書下した」と凡例で断っているが、天皇家を憚って削除したのではないかと考えられる。このように一般書や教科書で見られた本文への介入は、児童書においても同じく連動して起きていると言える。

さらに児童書と一般書とで併せて確認したいのは、戦いに敗れた為朝を擁護するような記述が見えることである。前出した博文館刊『少年英傑 尚武史談』には、次のような記述がある。

為朝智あり仁あり勇ある此の如くにして敗績を免れざるは皆頼長か剛徴自用の罪にして為朝が戦の罪にあらざるなり  
いくさに負けたことは「頼長か剛徴自用」であるためとし、罪の所在を明確にし、為朝を擁護している。さらに前出した山路の「為朝論」においても、

彼が死刑より免れしは始めより頼長の陰謀に与みしたるものにあらず、単に父に従つて軍に加はりしのみにして首従の罪自ら異なるものありしに依るべし。

としている。『保元物語』の場合、このように享受者が自身の擁護したい人物に敗戦の罪を背負わせないため、他の登場人物に原因を求める例は前近代から見える。流布本『保元物語』自体では、為義を擁護するため、「日比より地下の検非違使にてありけるが、よしなき新院の御謀叛にくみし奉り、年来の本望をも達せずして、出家入道してけるこそ無念なれ」と記し、崇徳院に非があるような書き方をする。さらに、『大乘院寺社雑事記』文明元年（二四六九）十一月十四日条においては、「於攝家者保元御乱ニ、宇治左府依流矢薨給、是ハ両帝御競也。臣下身無力事也」という記述がある。『大乘院寺社雑事記』を記述したのは、尋尊（二四三〇～一五〇八）、すなわち一条兼良（一四〇二～一四八二）の子息であり、同じく藤原氏の頼長を擁護したものと考えられる。このように享受者の立場により、物語の解釈が変わるという現象はいつの時代も同じであり、それは近代になっても公然と行われている。同じく博文館により刊行された『少年世界』は同社を代表する少年雑誌で、第四巻第一号（一八九八・一）には「為朝は日本武士の最高の標本なり」と記載されている。この時代の場合、そうした人々の為朝の理想化が、乱の原因の解釈を変えていったと考えられる。

## (二) 少女に向けた軍記物語の発信

前節のような物語の発信は少年少女たちに向けてされていたが、少女たちに特化した場合、どのように軍記物語は発信されていたのであろうか。軍記物語と明治以降の女性による享受の問題は先行研究においては榊原千鶴氏の研究<sup>④</sup>に詳しいが、さらに若年層に当たる少女たちと軍記物語の繋がりを見ておきたい。

明治四十三年（一九一〇）に、教科書も手掛けた出版社である金港堂から刊行された『少女鑑』の中には、『平治物語』の義朝の愛妾・常葉が登場している。この書の出版意図は、下記のように記されている。

偉人賢婦の伝記は精神修養の上に大なる力あり。家庭に於いて少女に読ましむべき良書甚だ乏しといふ声は絶えず耳にするところなれば、其要求に応ぜんがために本書を編して、子女を有てる江湖の父兄に薦む。

収録された人物は全て女性であり、紫式部や春日局、ナイチンゲールやジャンヌ・ダルク、虞美人といった女性たちと共に常葉が立項されている。本書は常葉のいかなる側面に「鑑」を見たのだろうか。話の末尾は下記のようにある。

当時常磐が三人の児を擁して木幡の雪に打ちなやめる様は、婦人の亀鑑として今の世に無上の画題となつて感嘆されてをります

常葉の位置付けとして、都落ちする道中、雪の中で子ども（今若・乙若・牛若）を守った母としての側面が強調されている。しかし、流布本『平治物語』では常葉の母としての側面は先出諸本ほど強調されておらず、流布本の特性とはずれが生じている例と言える。さらに本文中で示される、子どもたちが雪の中で「寒や冷たや」と嘆く場面は流布本では削除されているが、『少女鑑』では記載されている。常葉の話の繋がりで言えば、前述した『少年英傑 尚武史談』において、常葉の生んだ今若・乙若の話が掲載されているが、そこにおいても今若自らが「乙若其方も泣くなよ我もなかぬぞ」と発言したと改変されている。為朝の話の場合、不敬になりかねない行動が改変されることにより、子どもの訓育へと繋がられていた一方で、『平治物語』においては、子どもに対してさらなる模範的な姿が加えられることで、読者にとって手本となるように物語が活用されているのである。

しかし女学校向けの教科書においては、常葉の話はさほど収録されていないことは先述した通りである。少女たちが日



常で身に付けるべき教養と、成長し学校という教育機関において学ぶべき教養は異なりがあることが分かるのである。

## 五、おわりに

本稿では『保元物語』『平治物語』が具体的にどのように明治・大正・昭和期に発信されたのか、流布本『保元物語』『平治物語』の特性を踏まえつつ、その実態を明らかにしてきた。明治期において、文学と歴史の境界線を見据えた観点から始まった物語の位置付けは、次第に多様な解釈が生み出されていく中で、時代に即した把握が求められていくことになる。それは同時に、流布本の本文から読み取れる特性からは飛躍した解釈が生まれることにも繋がり、時にはそのために本文も改変され物語は発信されていく。その現象は『保元物語』の為朝の話に主に確認出来るが、それは近代における教育から見ると、『保元物語』と『平治物語』とで担っていた役割が異なるため享受の様相が違っていたことに関わると考えられる。さらに児童書においても、その目的とする児童教育ごとに内容は改変され、発信されていく。これらの動きはそれぞれ独立したものではなく、連動しながら両物語は一般の人々・学生・児童といったあらゆる国民へ発信されていたと考えられる。

冒頭で述べたように、現在、高大連携歴史教育研究会から挙げられた日本史用語の削除の候補には、「軍記物語」や「源為朝」、「源義平」の語も含まれている。しかし、かつてはその典拠である『保元物語』『平治物語』は文学・歴史の境界線が模索される作品であり、あるいは歴史の教科書においても為朝の話が国語教科書と同じように改変され、掲載されていた時代が確かにあった。前近代から脈々と引き継がれてきた物語および乱のイメージや認識は、近代の様々な媒体に継承され、変容し、そして教育の場にも影響を与え、残留してきた。現代の教育方針が如何に変化しても、そうした自身にも関わる知の変遷について、無自覚でいる必要はあるまい。

## 注

- (1) 朝日新聞平成二十九年(二〇一七)十一月十四日掲載。
- (2) 高大連携歴史教育研究会のホームページ(<http://www.kodaien-u-ryukyu.ac.jp>)に一覧が掲載されている(二〇一七年十一月三十日閲覧)。
- (3) 東京書籍、二〇一六刊。新訂第三版を参照した。
- (4) 『平家物語』の再誕(NHK出版、二〇一三刊)。近代における軍記物語の享受を考えるに当たり、兵藤裕巳氏『太平記(よみ)の可能性』(講談社、二〇〇五刊→一九九五刊の文庫版)、佐伯真一氏『戦場の精神史 武士道という幻影』(日本放送出版協会、二〇〇四刊)、久保勇氏『明治期(平家)の文化的展開をめぐる一考察』(千葉大学人文研究44二〇一五三)も参照した。
- (5) 江戸時代もまた、浄瑠璃や歌舞伎などが登場することから享受の在り方は大幅に変化している。注釈書の世界では、水戸藩の刊行した『参考保元物語』『参考平治物語』の影響も大きいことは明らかであるが、それ以外にも取り上げるべき資料は多くあり、稿を改めて論じたい。
- (6) 「時勢と英雄」(「軍記と語り物52」二〇一六・三)。
- (7) 「創成期保元物語研究史の考察 明治という時代」(「栃木孝惟氏編『軍記文学研究叢書3 保元物語の形成』汲古書院、一九九七刊)。
- (8) 「創成期『平治物語』研究史の考察 太平洋戦争終結以前」(「栃木孝惟氏編『軍記文学研究叢書4 平治物語の成立』汲古書院、一九九八刊)。
- (9) 流布本の教訓性については、拙稿「流布本『保元物語』『平治物語』の特性」(「国語国文85」5二〇一六・五)や「流布本『保元物語』『平治物語』における乱の認識と物語の改作」(「中世文学62」二〇一七・六)で論じた。
- (10) 成稿に際し、注7 栃木氏編著および注8 同氏編著所収の春日井京子氏作成の研究史年表も参照した。
- (11) 帝国大学文科大学教授などを勤める。星野については注4 兵藤氏著書や、注7 栃木氏論稿も参照した。
- (12) 永積安明氏他校注『日本古典文学大系 保元物語 平治物語』(岩波書店、一九六一刊)の解説においても、最初に星野の論文を掲げている。また、星野についての検証は注7 栃木氏論稿や注8 志立氏論稿に詳しい。
- (13) 原水民樹氏は、藤岡作太郎が最初に「流布本」という名称を用いたとする(「『保元物語』流布本の古態を求めて」(「言語文化研究2」一九九五・二)。研究史上においては正しいと考えられる一方、「流布の刊本」という紹介の仕方はすでにこの日本文学全書の時点で見えており、流布本の名称自体はそうした言葉に影響を受けている可能性も考えられる。
- (14) このとき両物語は稚児物語である『秋乃夜長物語』と室町末期成立の異類合戦譚『鴉鷺合戦物語』と同時に収録されているが、現在では、『保元物語』『平治物語』とこれらの物語が同じ巻で収録されることはない。
- (15) 落合については、八木雄一郎氏・辻尚宏氏「明治30年代における中学校国語教科書の編集方針 落合直文の国語教育観と編集教科書から」(「人文科教育研究36」二〇〇九・八)、

菊野雅之氏「落合直文『中等国語読本』の編集経緯に関する基礎的研究——二冊の編纂趣意書と補修者森岡外・萩野由之」

〔語学文学52〕二〇一五・二 参照。

- (16) 梶原氏は星野の論について、「物語が「事実」の検証をもつてする価値の視点からのみ裁量されている」とする。

- (17) 注9拙稿。

- (18) 注4大津氏著書。

- (19) 但し、同書における芳賀の執筆姿勢は「ナシヨナリスティック」とも評される(注4大津氏著書)ことから、必ずしも全て首肯出来るものとは限らないことは留意すべきである。また、明治四十四年に刊行された国民文庫においては両物語は「戦記中の名篇也」とされている。

- (20) 江戸時代において、『椿説弓張月』における為朝は言うまでもなく、水戸藩による『大日本史』や頼山陽による『日本外史』でも乱の説明に際し、為朝に言及している。

- (21) 内海は「保元物語が歴史として幾何に価値を有するかまた、鎮西八郎為朝が歴史上果して如何なる人物なりしかは、おのれのこゝに論ぜんとする問題にあらず」と、歴史学の観点ではないことを敢えて断っている。内海は翌年、「保元物語の文章」〔史学界1・2〕一八九九・三という論文も著している。

- (22) 注6大津氏論稿参照。

- (23) 注4大津氏著書。

- (24) 拙稿「血気の勇者」にみる室町期の語句表現とその展開——軍記物語を端緒として——〔多元文化6〕二〇一七・二。

- (25) 江戸時代においてもそうした風潮は存在し、『椿説弓張月』

など、新たに作品自体を生まれ変わらせている。流布本は、そもそも近世初期の段階からその時代ごとに利用されていたとも考えられ、詳しくは別稿で論じたい。

- (26) 拙稿「流布本『保元物語』『平治物語』の人物造型——為義・義朝像の拡大を通して——」〔国語国文86〕10二〇一七・一〇。

- (27) 露伴なども半井本などの存在に触れており、諸本の存在は研究者以外にも浸透していたことが分かる。

- (28) 成立期の上限については、釜田喜三郎氏「更に流布本保元平治物語の成立に就いて補説す」〔神戸商船大学紀要1〕一九五三・三、高橋貞一氏「鑑叢鈔と流布本保元平治物語の成立」〔国語国文22〕6一九五三・六参照。下限については、拙稿「流布本『保元物語』『平治物語』の成立期の下限——『榻鳴曉筆』との関係から——」〔国語国文83〕7二〇一四・七参照。

- (29) 但し、高木武『日本精神と日本文学』(富山房、一九三八刊)では、先行研究として藤岡や野村の検証を踏まえている。一般書ではなく、書誌学などを論じた研究書の場合、両者は触れられる。

- (30) 吉村重徳『平治物語新釈』(大同館書店、一九二七刊)も同様の観点である。また、流布本『平治物語』では、義朝や頼朝への重視が強いものと考えられる(注26拙稿)。

- (31) 注4大津氏著書。

- (32) 流布本は先出諸本を踏まえて改作しており、「御ゆるされを蒙て」の記述は流布本段階で加筆される。

- (33) 流布本は先出する諸本を改変して成立しているが、先出諸

本ではこの部分「荒儀なり」としか記さないところ、流布本は「以外の」と加えることで批判を強める。

(34) 注6大津氏論稿。

(35) 教科書・指導書に関しては、海後宗臣氏編『日本教科書大系 近代編』（講談社、一九六一刊）、井上敏夫氏編『国語教育史資料』（東京法令出版、一九八一刊）、府川源一郎氏『明治初等国語教科書と子ども読み物に関する研究―リテラシー形成メディアの教育文化史―』（ひつじ書房、二〇一四刊）などを参照した。

(36) 教科書研究センター、一九八四刊。

(37) 但し、平家物語の内容が保元物語の項目に収録されている部分もあり、注意が必要である。

(38) 注15同。

(39) 注29高木著を見ると、この時期は、「健全健全な日本文学には、日本精神が豊富に宿つてゐるのが認められる」ため、日本文学の研究の必要性を説く風潮もあったことが窺える。

(40) 鈴木彰氏『明治期の児童・少年雑誌にみる中世軍記物語関連記事について―『日本之少年』を中心として―』（明治大学人文科学研究所紀要72）二〇一三三三。

(41) 鳥越信氏編『はじめて学ぶ日本の絵本史Ⅱ―15年戦争下の絵本―』（ミネルヴァ書房、二〇〇二刊）では、この絵本のシ

リーズについての「功罪」について論じている。また阿部紀子氏『子供が良くなる講談社の絵本』の研究―解説と細目データベース―（風間書房、二〇一刊）も参照。

(42) そのことが流布本の為朝批判の姿勢とも繋がる可能性は既を示唆した（拙稿「流布本『保元物語』『平治物語』の人物造型―為義・義朝像の拡大を通して―」（『国語国文86』10）二〇一七・二〇）。

(43) これは「少国民」独自の認識ではなく、先に刊行された『参訂保元物語評釈』（青山堂、一九〇〇刊）の解説を踏まえていることが分かり、注釈書と児童書との連動が見える一例と言える。但し、三木の『保元物語講義』においては特に加筆はされていない。

(44) 榎原千鶴氏「女性が学ぶということ―女訓から考える軍記物語」（『日本文学51』二〇〇二一二）。

(45) 詳しくは別稿で論じる。（日本文学協会（二〇一七年七月二日）論者の口頭発表「流布本『保元物語』『平治物語』における女性哀話の改作意図」）

「付記」本稿は、早稲田大学特定課題研究助成費（課題番号2017K067）による成果の一部である。

## The Transmission of the *Gunkimonogatari* in Modern Japan: Focusing on *Hogen monogatari* and *Heiji monogatari*

TAKIZAWA Mika

This paper focuses on *Hogen monogatari* and *Heiji monogatari* which are read with *Heikemonogatari* as representative *gunkimonogatari*, in order to clarify how these tales are read and transmitted in modern times.

To begin, focusing on exposition in complete work of Japanese literature and general book, for capturing the feature of various periods, it is necessary to see Minamoto Tametomo who is bushi in *Hogen monogatari*. In the Meiji period, it was often the case that these tales were captured from the point of view of locking one's sight on having a consciousness of a border between literature and history, while what was written about Tametomo is less. In the Taisho period, emphasizing Tametomo became more prevalent, a new movement which relativized previous studies was born, and various explications coexisted. In the Showa period, these freedoms disappeared and things happened which altered the original sentences.

Turning to textbooks of Japanese language, in the case of *Hogen monogatari*, the story of Tametomo is frequently used as a teaching material; on the other hand, in the case of *Heiji monogatari*, the story of Minamoto Yoshihira, who is said to be a bushi similar to Tametomo, isn't a necessarily teaching material, and the story of Fujiwara Mitsuyori are used a lot because they played the role of teaching different Japanese ideas in each story. As a result, the original sentences were altered and the story of Tametomo was widely transmitted.

In addition, about children's books, content that is made for children's education was made by combining the *Chinsetsuyumiharizuki* and *Hogen monogatari* so that the courageous fortune and the filial piety of Tametomo would be transmitted, or by modifying the original sentences as seen in general books.

These actions are thought to be linked, and they interpreted the tale in accordance with the occasion and revealed that it was sent to all people such as general people, students, and children.